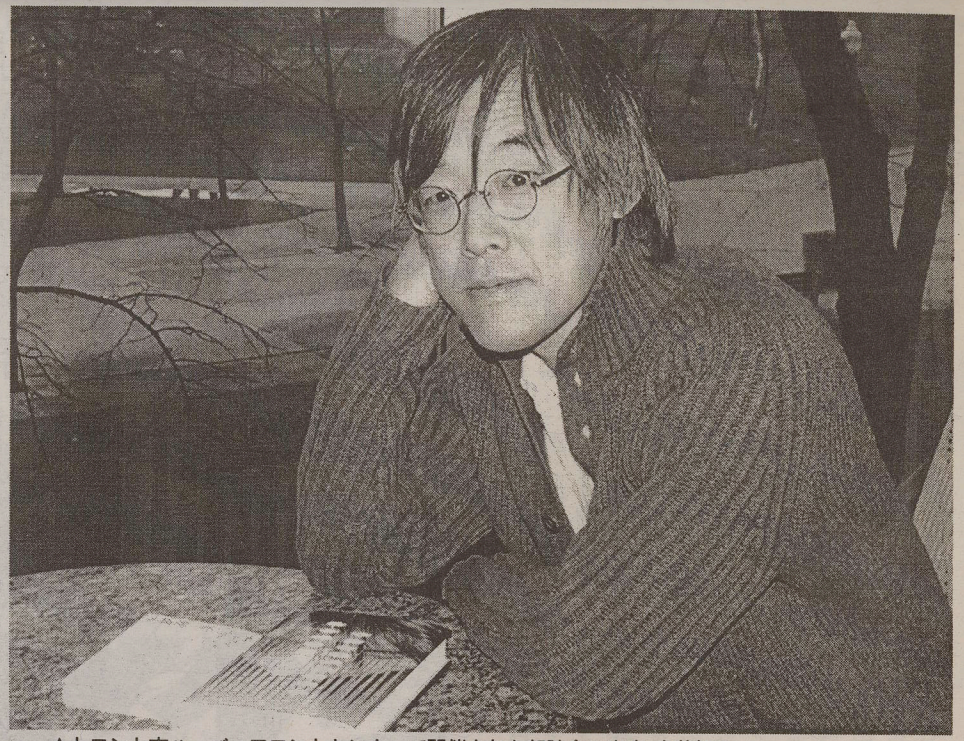
HARBOURFRONT READING SERIES

学生運動・逮捕・失語症

激動の青春時代を投影した「さようなら、ギャングたち」英訳出版

作家 高橋 源一郎さん



▲トロント市ハーバーフロントセンターで開催された朗読会に出席。自著初の英訳である「SAYONARA, GANGSTERS」が絶賛された高橋源一郎さん＝ウェスティン・ハーバーキャッスルホテルで３月31日

18歳から19歳にかけての一番多感な時期を拘置所で過ごした高橋源一郎さんは、そのときに受けた精神的な打撃により、10年近く言葉を失ってしまったという。その空白を埋めるように今、作家として言葉を駆使する生活をしている。連載小説４本、雑誌・新聞での書評担当５社、そのほかエッセーや雑誌へのコメントなど、ものすごい勢いで書いている作家だ。

〈取材・まとめ　平山紀久子〉

文学青年と学生運動

僕が大学に入学した１９６９年は、学生運動の真っただ中の時代。全国で４００校くらいがバリケードストライキをしたという年で、東京大学の入学試験が中止になった象徴的な年でもありました。

中学時代から文学青年だと自覚していた僕は、高校生のときから学生運動にはかかわっていました。

というのは、当時、文学的なラジカリズム（激しさ）と政治的なラジカリズムがとても近い関係にあって、文学青年は、政治的にも文学的にも、ディープにコミットメントするのが普通だったんです。

学校に行くとラジカルな政治活動をして、家に帰るとラジカルな文学作品を読んで、ラジカルな文学を書く。そんな感じで、政治と文学的表現が結びついていた時期でした。僕も、そんな世界的なトレンドに乗っていた一人だったというわけです。

〝ディープにコミットメント〟するには、党派的な動きをせざるを得ないのですが、その政治思想自体に信頼を置いているかというとそうでもない。「セクト内ノンセクト派」といわれていました。文学的な二面性ですね。

その複雑な昼間の矛盾を、夜の文学活動で解消するというのが、当時の文学青年でした。

逮捕・拘留・失語症

僕が逮捕されたのは、ベトナム戦争中の１９６９年11月。

当時の佐藤栄作首相が、日米関係強化という目的で訪米することになりました。それが政治闘争上のターゲットになったんですよ。

空港にみんなで押しかけました。機動隊との衝突になり、いわゆる街頭での暴動という理由で、その日だけで１万人近いといわれる学生が逮捕されました。

釈放されたのは翌年の８月。そのときでも、拘置所にはまだ１００人くらいが入っていました。その中で10代だったのは、僕を含めて５人くらいでしたね。

どうしてそんなに長く拘留されたかというと、黙秘していたんです。黙秘するというのが運動家の決まりごとだったんですよ。自分のことだけで済めばいいけど、一つ話し始めると、必ず人のことも話してしまう。そうなると、逮捕されなかった人まで逮捕されることになる。だから僕は自分の名前さえも言わなかった。

朝８時から夜の８時まで12時間の取り調べで、ひたすら下を向いて黙っているんです。独房でしたから、人と話すこともしない。もはやしゃべることは普通の状態ではなくなってしまったんです。

それから、政治活動というのは、大きく「行動」と「言葉」とに分けられるんですけど、言葉の方はね、責任が取れないんですよ。

「革命」というスローガンを掲げて運動しますけど、叫んでいる当人達が、その言葉を信用していない。つまりウソをつき続けるということですよ。何カ月も言葉を使わないでいる間に、それも難しくなってきた。

そうやって一種の失語症になったんです。実際、発語が難しくなりましたよ。死ぬまでずっとここにいるんじゃないかという妄想に取り付かれたりもして、精神的にもおかしくなりますよ。今でも思い返すのは辛いです。

デビューまでの暗黒期

僕が釈放されたころから学生運動はゆっくりとした退潮期を迎え、71年の連合赤軍リンチ殺人事件によって、決定的に人気を失ってしまったんですね。そうして、今でも続いている学生運動の冬の時代になりました。

他の人たちは普通の学生に戻って、４年たったら卒業していきま

したけど、僕にはそれはできなかった。精神的に。

文学青年として、物書きになりたいという願望はあったから、じゃあ、そろそろ文学に取り組もうとしたんです。でも、いざ書こうとすると、何を書いていいのか分からなくなっていました。つまり、目標喪失ですね。

その後も学校にはいかず、かといって書くこともできず、30歳で小説家としてデビューするまで、肉体労働に従事していました。

書けないのが辛いから、他の人が書いているものも読めなくなりました。朝起きて、仕事して、ご飯食べて、疲れて帰ってきて、一杯飲んで寝る。思えば健康的な生活でしたね。

「さようなら、ギャングたち」——詩に近い小説

実は、デビュー作の前に別の小説を書いたんです。これは、とても暗い暴力的な作品で、本当はこれで、それまでうっせきしたものを掃してしまう予定だったんです。

これで作家としてデビューできると思ったんですけど、応募した文学賞の最終段階で落ちてしまいました。そして、ある編集者から「他のものをすぐに書いて来い」と言われたんです。

そう言われて慌てて書き上げたのが、第2作目として構想を持っていた「さようなら、ギャングたち」でした。

「さようなら、ギャングたち」では、暗い過去の自分を突き抜けて、未来に向かう少し明るくて優しい感じにするつもりでした。でも、やっぱり過去がひっかかっていて、暗い気分が残っているなあという作品になったように思います。

よく、詩のような小説だと言われるんですけど、実は深いわけがあるんです。

当時、僕は日本の小説に強い不満があったんです。最大の不満は不自由だということ。

日本で、ごく最近になって発展した、ある狭い枠の中でだけでしか書かれていない「小説」という形式。その小説にできるだけ自由な形を与えたかったんです。

詩は自由です。だから詩のような自由さをもった小説を書きたかったんです。

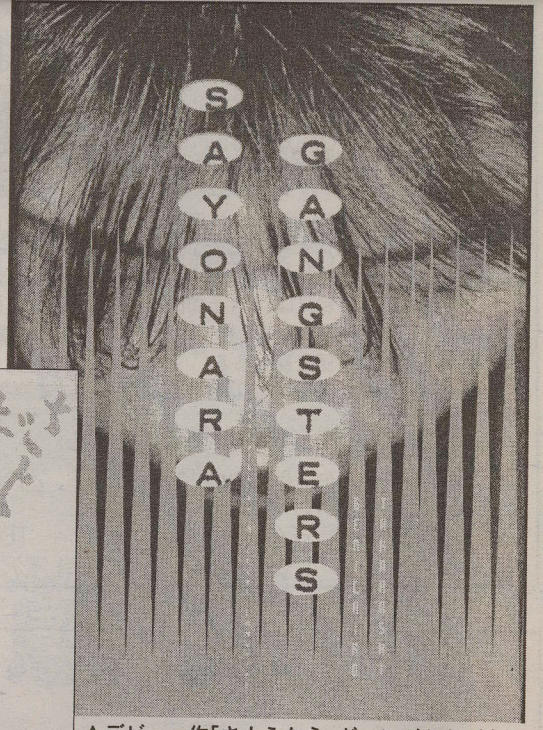
詩人は詩を書きますが、自分は詩に対する強い共感を持ちつつ小説を書こうと。

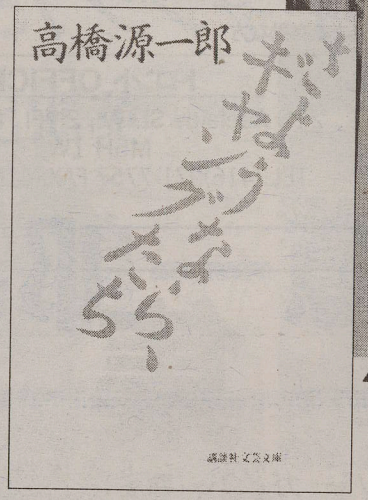
小説家は「おはなし」を書く。人物、事件、ストーリーを書く。詩人は「言葉」を書くんです。そこに書いてある事件よりも、言葉そのものを丁寧に書く。

小説家だって、そんな風に書いてもいいんじゃないかと思います。

キメラという怪獣

小説というのは、芸術形態としては比較的新しいものです。





▲デビュー作「さようなら、ギャングたち」(左)の英訳版「SAYONARA, GANGSTERS」(Vertical Inc.)。高橋さんは英訳版を手に「いかにもヴァーティカル、いかにもチップ・キッドという大胆な表紙ですね」とニッコリ。一般書店で販売中。$27.95

新しく生まれたものが持つ利点は、周りにあるものを吸収できるということ。例えば、映画は演劇や音楽など、前から存在しているいろいろなものを取り入れることができる。小説も同じで、いろんなものを吸収する力があるんです。

それなのに、小説家は自分が生まれた時点にあるものは吸収するけれども、その後に生まれたものは、もう見なくなってしまう。例えばマンガ。ある年齢以上の作家にとって、マンガは後から生まれたものだから、もう関係ないと思ってしまう。

本当は、小説はどんどん未来に向っているんだから、そのときそのとき、必要なものはどこからでも取ってしまえばいいんです。マンガであるかもしれないし、今でいえばインターネットとか。

ギリシア神話に、キメラという怪獣が出てきます。キメラは、さまざまな動物のいろんな部分が集まって、一つの生物になっている怪獣です。

小説も、キメラみたいに他のジャンルを食って、どんどん自分の養分にしていかなければと。僕はそう思いますね。

書くことと読むこと

インターネットの影響で、書いて発表するということがとても簡単にできるようになった。それを受けて、最近、作家志望者が多いというのは僕も感じています。

書くということに、興味があり、やりたいと思うなら、やるべきでしょう。ただし、書き始めてしまうと、とても困難な道が始まるので、気をつけなければならないですよ。

何を気をつけるかというと、書くことと読むことは常に連動していなければならないということ。

昔は、手で書いた原稿が媒体に載って発表されるまでに、いくつものステップを踏まなければならなかった。その過程で、反省する時間がいくらでもあったんですよ。

今はね、書いて発表までが短縮されていて、何がカットされているかというと、反省する時間です。自発的に自省する時間を持つようにしなければならないでしょう。

反省する時間を持つということ、それはつまり、読むということです。自分の作品を他人のものを読むように読む。そのためには、常に他人の作品も読まなければならない。「読むことを重視する」アドバイスをするとしたら、それにつきますね。

僕がたくさん書評するのは、自分のためでもあるんです。職業上の興味というんですか。同業者として、他の人がどういう考え方で書いているのかを、ペンを持って、チェックしながら読んでいます。時速100ページで読むのが僕の平均かな。

昔は人の3分の1仕事をすればいいと思っていたんですけど、あるときそれじゃいかんと思い立って、人の倍することにしたんです。結局、前の6倍働いているわけですよ。時間がいくらあっても足りない。1日が48時間くらいあれば、もう一冊読んで、もう少し原稿を書いて、しかも眠れるという生活ができるでしょうね。

高橋　源一郎
(たかはし・げんいちろう)

1951年　広島県尾道生まれ
1959年　父の経営していた事業が倒産。その後の高橋家の経済的な波に伴い、日本各地を転々。「身分的にも地理的にも変化の激しい子供時代を過ごした」
1966年　灘中学を卒業、灘高校に入学　このころから文学に傾倒する
1969年　横浜国立大学入学。学生運動中に逮捕、拘留される
1970年　拘置・拘留の影響で失語症となる。「食べるために」肉体労働者としての生活を始める
1977年　在学期間満了で大学を除籍　30歳までの10年間を肉体労働に従事しつつ、自ら失語症のリハビリに努める
1981年「さようなら、ギャングたち」で第4回群像新人長編小説賞の優秀作に選ばれる

その後、小説、書評など多数。精力的に執筆活動を続ける。また競馬評論家としても有名